「死生の間」をさまよって
ウラルを越える

滋賀県　澤田伝一

昭和十九年二月、満州四四七部隊自動車隊へ入隊、二十年八月十五日、北朝鮮咸興市に駐留していた私が、その後ソ連軍の捕虜となる。我々日本人の帰還に関して、彼らの度重なる欺瞞にあい、想像もつかないウラル山脈を越えてヨーロッパに入った。

全くの辺境の地へ、寒冷と雪中を、疲労と空腹で、徒歩による「死生の間」をさまよって八十キロの行軍をした。数多くの行方不明者や凍傷患者の発生、救助も手当てもままならず、多数の犠牲者を出す結果となっている。

設備も欠陥そのものの、抑留収容所生活は、特に第一年度は酷いものであった。ようやく収容所の移動とともに、第二年度に入ってからは、特に帰還をソ連側で予定したこともあって、以来徐々に給与関係が改善されてきた。

帰還者として出発が現実化して、初めて彼らの言動を信頼し始めた。百％の信頼と安堵を抱けたのは、帰還船が舞鶴港へ入港した時点であった。

収容所における生活で、南京虫やシラミに悩まされたことはまだしも、発疹チフスと腸チフスの発生からの死亡、栄養失調と労働過激が原因で死亡する者等、多数の犠牲者を出している。誠に残念なことで、異国の丘に眠るこれらの帰らざる各位のご冥福を心よりお祈りいたします。

我々は、その犠牲の上に今日現在余生を送っている立場である。戦後の日本の再建に各人のそれぞれが精いっぱい努力を重ねた事実は、現在の日本が世界に誇れる強力な経済力と、それをバックにした国民生活のレベルアップ効果にみることができる。

今後は、国際社会の一員として、単に経済面のみならず、政治面を合わせてのリーダーシップを発揮して、世界に貢献する責任も生まれた。今後は真の世界平和

を樹立すべきであり、未だに各地で局部的な戦争が続いてはいるが、もう二度と再び、戦争の勃発などのないことを願いたいものであります。

エラブカ収容所生活状況をお話しいたしたいと思います。

エラブカ収容所の収容総人数は二千名くらいで、旧枢軸国側で、交戦参加の果てに敗北した日独伊、ハンガリー、バルト三国、それに満州国などの将校クラス以上、佐官級までの人々で、我々日本人が大部分であった。次いでドイツ人となっていて、他の国の人々は極めて少数らしい。

それに対して、たった一か所の便所で、その場所も所内の奥に位置しており、各建物から百ないし百五十メートルの距離はある。しかも、その様式たるや、ハモニカのように仕切られていて、排尿には別に問題はないが、排便は大変で、両脇で仕切り、枠木をしっかり抱え込み、約三メートルはあると見られ、下は広く、深さはわからない溜池へ排便落下となるので危険である。隣の同じ格好をした者が互いに顔を見合わせる。時には国際的な出会いもあって、双方観察し合い、異様とも言える光景である。

昼間はよいが夜間、特に深夜は辛く、寒い暗い危険とあって、違反行為を承知の上で、密かに廊下の隅で空き缶を使用して用を足す年配者が多く、発覚すれば罰として黒パン一食分が支給されないことになっていても、やむことなく続いていた。

食堂は第一は九十八名を、第二は百二十八名の収容可能の二か所が同じ建物の中に隣接しており、食堂の人口までは暗くて長い廊下となっている。食事の内容は燕麦や大麦のカーシャで、小型鉄製洗面器といった容器、量は五百グラムから七百グラムということだ。別に各隊の宿舎で、一人あたり黒パン三百グラムと砂糖三十グラムが支給されるが、黒パンは水分が多く、砂糖は白キザラを支給された。

民主教育としては、デモクラシーに対する誹謗、共産主義の礼讃、帝国主義の否認などの一般論から始まった。参加しない者に対しては罰が加えられた。

作業は原木運搬に従事、ラーゲルから約十六キロ地

点の山間部にある伐採集積地から直径約三十センチ、長さ二メートルくらいに切断されたものを、橇一台に四本積み重ねて括りつけ、人力で前綱を引く者四名、後より棒で後押しと、舵とりする者一名の四、五名で、坂道を下ったりして、大汗をかきながら、往復に半日以上をかけた。

時として真っ暗になって、やっとラーゲル炊事場前に到着、待ち構えていた薪割り班によって燃料用に切り割られていく。

前日までの、薪のストックが乏しい場合は、到着したばかりのものを処理して使用することになる。こうした場合は予定時刻が大幅に遅れる結果、それでなくとも乏しい食糧で、空腹感のところへ輪をかける始末となり、苦労させられた。

その後伐採作業に従事、二十三年十一月頃まで行い、ダモイという命令が出て、十一月中旬、貨物列車でナホトカへ到着した。我々の宿泊、待機は砂地に設置された幕舎である。

既に以前から駐留している日本軍俘虜兵で、完全なまでに共産主義を信奉する連中から、一人ずつ細部にわたって検査、検閲などを受けた。思想問題の質疑は我々将校集団であるがゆえに厳重を極めた。これに反発した者は帰還延期となり、ナホトカで作業に就労させるというもの。

舞鶴入港十一月十六日、日本の緑に包まれた土地に上陸、いよいよ帰還だと思うと心が踊る。小艇で桟橋に足を踏み入れたとき、出迎えの看護婦が微笑を浮かべ、真紅の口紅をつけての薄化粧姿を見て、我々一同がその素晴らしい美観に胸打たれた思いであった。一人当たり三百円の支給を受ける。再会を誓って、しっかりと握手、肩を叩き合って、各人がそれぞれ解散、ここに〝ウラル〟を越えての抑留生活に終止符を打った。